

続 生命ある限り

曾野綾子

著者紹介 その あやこ

昭和6年東京に生まれる。

聖心女子大学英文科を卒業。「新思潮」同人となる。

昭和28年在学中に作家の三浦朱門氏と結婚。

29年「遠来の客たち」で文壇にデビュー。

「無名碑」「砂糖菓子が壊れるとき」「生贄の島」「誰のために愛するか」「生命ある限り」ほか著書多数。

本名 三浦知寿子。

現住所 東京都大田区田園調布3の5の13。

続 生命ある限り

昭和四十七年五月十日 第一刷  
昭和五十四年六月二十九日 第七刷

定価 八五〇円

著者 曾野綾子

編集人 笠井晴信

発行人 深見和夫

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 一〇〇

大阪市北区野崎町八の十 一五三〇

北九州市小倉北区明和町一の十一 一八〇二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

続 生命ある限り  
目 次

|            |     |
|------------|-----|
| 紫の寺        | 7   |
| 海鳴り        | 15  |
| 海の眼ざし      | 23  |
| 女詩人        | 31  |
| 甘い言葉       | 39  |
| 壊れた椅子の話    | 46  |
| 復讐の夜景      | 51  |
| 銀杏の梢にかかる星  | 59  |
| コレクションは本   | 67  |
| 蒼い火花       | 75  |
| 砲声とブーゲンビリア | 83  |
| 女だけの時間     | 91  |
| 正直な話       | 99  |
| 陰の部分       | 107 |

|             |     |
|-------------|-----|
| 天に帰る        | 115 |
| 或る誠実        | 123 |
| 海辺の殺人       | 132 |
| 青春多忙        | 140 |
| 砂丘の家        | 148 |
| お揃いの赤いシャツ   | 156 |
| 《その人》は《あの方》 | 164 |
| 荒野          | 172 |
| ひとりだけの哀しみ   | 197 |
| 三人の妻への便り    | 218 |
| 隠された顔       | 253 |
| 白鷺のいる風景     | 275 |
| 解説          | 309 |
| 鶴羽伸子        |     |

装  
丁  
堀  
文  
子

続  
生命ある限り





## 紫の寺

出先でふと会った佳人は忘れ難い。

その時もそうであった。仕事で立ち寄った家で、お茶を持って来てくれた女がいた。うなじの線が瑞々しい。生え際も初々しかった。鼻筋に気品さえある。足許をみるとストッキングをきちんとはいていた。藤色の服に、真珠のネックレスをつけている。考えてみれば、客を迎える時には、自分の家でもそれくらいの身づくりはするかも知れない。しかし何となくそのうちの娘とは見えないのである。年は、若夫人と見るには若すぎ、未婚の娘と考えるには、少し落ちつき払っている。

果たして、その家の奥さんからは、

「親戚の娘でございますが、今たまたま訪ねて来てくれましたもので」

と紹介があった。

「由希子さん、あなたもお座布とお茶を持って、お相伴させて頂きなさいよ」

と言われると、

「よろしいでしょうかしら」

と応答も自然であった。娘を席につかせてから、奥さんは、

「このひとも、もうそろそろ、急いでお相手を探さないことには、間もなくオールド・ミスって言われる年になりますのに」

と年上の女というものは常に残酷な物の言い方をするのであった。由希子は悪びれもせず、微笑してその言葉を受けとめている。問わず語りに、この娘は今、彫金の勉強をしていて、そろそろ趣味がお金にもなりかかっており、縁談もかなりあるのに、片っぱしから断わって、もう二十七歳になった、とその家の奥さんは言うのだった。

「こういう女は贅沢ぜいたくなんですか。皆、過ぎた御縁と申し上げねばならないようなお宅から貰もらってやる、とおっしゃって下さるのに、それを片っぱしから断わってしまうんですから」

「いいえ、過ぎた御縁ばかりだからお断わりしたのよ。家を建てて下さる。車も指輪も買って下さる。だけど仕事はやめるようにでは……」

「けっこうな御身分だというのよ、そういうのを」

とたしなめられても、

「でもそれじゃ、いよいよお妾さん<sup>めかけ</sup>になりに行くみたいな気がして」

と静かな口調である。

「でも、それなら、ついこの間のお話ならお受けしてもよかったんでしょ。あなた好みだったんでしょ。お相手は学者で、お金も虚名もない方なんだから……」

「ええ、その点では、私、好意を持ったんです。母一人子一人の家庭で苦勞して来た方でしたし。ですけど、あちらとは……」

「あちらとはどうしたの？」

「あちらの御性格が……」

と言いかけた時、

「ごめん下さい、田中さんはこちらでしょうか。田中恒三さんは」

と郵便かテバートの配達人らしい声が裏でした。奥さんが立って行った気配を聞くともなく聞いていると、運ばれて来た品物について何か行き違いがあったらしく、長い交渉が始まっている。すると自然に、

「どうして、私に好意を持って下さるとおっしゃる方のお気持ちを受け入れられないか、と言

われると困るんでございますけれど、おもしろいことがございました」

と由希子は話し出した。

「鎌倉の瑞泉寺というのをご存じでいらっしゃいますか？」

言われても、すぐには思い出せなかったが、

「あの山の奥の方の……紫陽花<sup>あじさい</sup>で有名な明月院ではないけど、やはり紫陽花がたくさんありまして……」

と説明されると、眼の前の由希子が服の色から突如として紫陽花の精になったように躍り出て、私は寺の全景を鮮やかに思い描くことが出来たのだった。

「花の頃<sup>はなごころ</sup>にいらっしゃったことございます？」

そうではなかった。私がそこを訪れたのは八月であった。山はすでに降り注ぐようなひぐらしの声に包まれていたのを覚えている。驚いたことに、紫陽花のすがれの花が少し残っていた。その残りの色香を受けつごうとするかのように桔梗<sup>ききょう</sup>が花盛りで、爽<sup>さわや</sup>かに溪を渡って来る微風に揺れていた。

「私と縁談がございました方は、さっき申しましたように、母一人子一人で慎しく暮らしていらっしゃった方で、しかも英文学の学者でいらっしゃるんです。私、先生という職業が好きでしたから、もしかするとこの方こそ、私が一生を託す方じゃないかと、何度か、自分で自分に

暗示をかけるようなことさえしたんですの。

どこと言って非難できない方でした。もの堅い、きちょうめんな性格の方ですし、礼儀正しいし、その上、多分、美男と申し上げなきゃいけないような顔立ちの方なんです。

只、ちょっと口で御説明申し上げられないほど、どこか微かにビントが狂うことがあるんです。お話ししてて、ほんのちょっとでございすけれど。その他の点では、物知りですし、慎重ですし、よく教えて下さいますし、本当にいい方でした。

それで、お受けするとも言えず、さりとてお断わりの口実もない儘に、或る日瑞泉寺にまいりました。実はちょうど同じ季節だったように思います」

私は彼女にどんな服装で行ったのか、と尋ねた。

「その日にはこんな色の服は着てまいりませんでした。レモン・イエローの、白い系でステッチをかけたつまらない麻の服だったと思います」

と彼女は微笑した。

私には彼女の言葉遣いのきめのこまかさがよくわかった。紫の花の中では同系色の服など埋もれてしまうのである。

「私が行った時も花の時期でございせんし、そのせいかお参りの人も少なくてよかったんですけれど、やはり驚いたのは、桔梗でございました。あそこのお坊さまは、どういう方か存じ

ませんけれど、紫という色がお好きな方でいらっしゃるんでございますね。水仙も萩も多うございましたが、萩にも紫がありましたかしら。

狭いお寺でございましょう。長い年月に、よれよれにすり減ったあの石段を上ってまいりますと、いつの間にか、紫陽花の繁みに迎えられていて……勿論、葉ばかりでしたけれど、中に一輪、二輪と本当に花が残っているんでございますね。これが全部花になるのだな、と思ひ描きながら松風の中に立っておりまして、あたりの繁みがすべて、海のような青さになつて、激しく揺れ出したような気さえました。

それで小さな山門をくぐりますと、中に一種の石庭のようなどころがありましたでしよう……いいえ、桔梗が生えているのですから少なくとも石庭ではない訳ですが、桔梗の花の紫が、瑞々しく星のように浮いているような庭ですね。桔梗というのは、本当に風と合う花でございすね。

お庭の一隅には、お茶を飲ませるようになっているところもございました。そこに何という種類なのか、今はめったに見られなくなつた、野性の地鶏のようなのがこつこつと遊んでおりまして、どこを見ても選びぬかれた自然さでした。

私のお相手の方は仏教の伝来の系統などについて話して下さいますので、御専門以外のことも何とよくご存じなんだろう、と感心したのです。……ところがご存じでございますか？　そ

のお庭の一隅から墓地へ行けるような小径があります。おもしろいことに、まるで隠し墓地のような地形ですし、小径の入り口には檀家以外の方の立ち入りを禁止しますという意味の立て札もあるのですが、私たちは数メートル歩いて、お墓の入り口の鉄門のところまで行ってみました。『幽冥境を異にした』という言葉がこれほど明確に思われた瞬間はありません。その入り口から奥は死者たちのいる所なのです。墓地は山を切りくずして作ったようにも見えますし、切りとったようにそこだけ異様に白々しいのです。墓石の形も背丈の低い新しいものなのでびっくりしました。

そして墓地はとてよく管理されていて、ゴミ一つ落ちていませんでした。

その時です。私たち二人は——彼も私も——偶然同じものに目をとめたのです。それはすぐ近くの真新しい墓石の背後ににゅっと立っている紫色の人間の手でした。いいえ、からくりは簡単なので、つまり墓石の背後に一本の庭簾にわばうきが立てかけてあり、そこに園芸用のゴム手袋が片方だけはめてあるだけのことなのですが、その色が濃い紫なのです。園丁らしい人の姿はないのですが理由もなく、私の背筋に悪感おかんが走りました。

『あの手袋を見てごらんさい』

と傍らで彼も呟つぶやいた時、私は彼と共に初めて同じ感覚で語り合えるかも知れないという期待に胸を躍らせたのです。それはごくつまらないことでした。その手袋がぞっとするほど理由も

なく、気味が悪い、というそれだけのことなんです。

ところが、彼が言うんです。

『このお寺はよく気をつけてますね。園芸用の手袋までちゃんと色が揃そろえてある』

この方のほうが、多分ずっと明るく前向きで物を見られる方なのだろうと思います。けれど、これだけ感じ方の違う二人が結婚しましたらどうなりますでしょう。本当に、その妖あやしいほど美しくて薄気味悪い墓地の入り口で、私は、その方とのお話をお断わりする決心をしたのでございますけれど、こんなこと、ここのうちで話しても、決してわかってもらえませんか」

由希子が悪戯いたづらっぽく呟いた時、この家の奥さんは、「本当にこの頃の人は無責任で」などとまだ陽気に腹を立てながら、席へ戻って来たのだった。



## 海 鳴 り

皆生温泉の宿の部屋のすぐ前は砂丘であった。夜見ヶ浜という名前だという。レースのカーテンを開けてみると、護岸工事に使うのであらうテトラボットが、五、六十個も西陽を浴びて、白砂の上に巨人の玩具おもちゃのように桃色に染まっている。

部屋は古いのが取りえであった。そこだけ離れのようにになっている。柱は柔らかく面がとつてあり、造作はすべてさりげなくて嫌味いやみがない。

本館は、冷酷な鉄筋コンクリート造りだから、そこにきっかりと収められた部屋の無意味さは察しがつこうというものである。古い部屋に通されてよかったと思った。立ち上がってあちこちの電灯をばちばちつけてみる。間もなく陽が暮れる時間であった。